

椅子は椅子

登場人物

男

悟

恵

道子

加藤

椅子屋

人々

人ならざるもの

椅子は椅子 あらすじ

ビト

いくつもの椅子がある。それらの椅子は、人に、あるいは、人ならざるものに座られ、選ばれ、連れて行かれる。たった一脚の椅子を残して。

疲れた男がやってくる。男は、残された椅子を見つけ、吸い込まれるように座る。そして、一息つく。それを見つけた悟は、男を突き飛ばし叫ぶ。「兄ちゃん！」そんな悟を慌てて追ってくる恵。男は勝手に座ったことを詫びつつも、それは椅子だと主張する。しかし悟は頑として認めず、兄ちゃんだと譲らない。そこで二人は、結論を恵に委ねる。恵は戸惑い悟に助けを求めるが、悟は自信満々に言っつてやれ言っつてやれと繰り返ばかり。困った恵が、震えながらも答えを出そうとした時、飛び込んでくる影がある。

道子である。道子は自分の子供、明を探している。当然知らない三人。道子は肩を落としながら去ろうとすると、椅子が目に入った。「明！」力いっぱい椅子を抱きしめる道子。混乱する三人。譲らない悟と道子。混乱する男と恵。場が混沌としていく。そこに、道子を追いかけてきたクリーニング屋の加藤が登場。なんとか場を収めようと、加藤は、道子と自分、そして明のここまでのいきさつを、鼻を何度かかみながら語る。その荒唐無稽な話に、最初は疑っていた三人も、どんどん引き込まれていき、しまいに、前のめりになって話を聞いている。しかし加藤の話も空しく、道子は椅子を明と呼び続ける。いらだった加藤は、そんな道子を蹴り飛ばす。あわててそれを諫める男。もみくちゃになる三人。

そんな三人の乱闘を見ながら、恵はなんとか悟の目を覚ませようとするが、悟は椅子を兄ちゃんだと譲らない。喧嘩になる二人。そこにまた道子が飛び込んで、悟、道子、男、恵、が椅子を奪い合う。それを見かねた加藤が、無理やりにでも道子を家に連れて帰ろうとする。しかし道子は、頑としてこの場を動かない。

「では！ 店で私達を待っているのは？」加藤はそう言い、明の存在に疑問符を投げかける。混乱する道子に、加藤は明の存在の不確かさを矢継ぎ早に突き付ける。そして、道子の肉体への欲求をむき出しにしていく。そんな加藤を、道子が、笑った。嘲笑った。確かに存在していたはずの明。その存在をたやすく踏みにじられた道子は、加藤

に隠していたとびっきりの秘密を明かし、言葉のナイフを抜く。加藤はその話を聞きながら、なにかに取りつかれたかのように鼻をかみ続ける。鼻血が出て、かみ続ける。

道子の話を最後まで聞いた加藤は、鼻血まみれの顔のまま、あらん限りの力を持って道子を絞め殺し、自分のものにしようとする。慌てて止める男。悟は椅子を、三人からかばう様に抱きすくめる。そんな悟を、恵は見つめている。なにかを、伝えたいような目で。

そこに響く声。「こんなところにいたのか！」現れた男、その名も椅子屋。この男の登場で、場は更にかき乱される。はたして物語は、椅子は、どうなってしまうのだろうか。

実存主義の影響が見え隠れする、不思議なお話。

オープニング

世界中に無数の椅子があるように、舞台上には大量の椅子がある。人々、人ならざるものがやってきて、思い思いの椅子に座る。そして、その椅子に満足すれば、それを持って行って去る。以下のセリフは誰が発してもよい。順番も自由にしてよい。

誰か うん、これだこれだ。

誰か 助かるわあ。

誰か 今までで一番だ。

誰か 微妙だな。

誰か このフィット感、たまんないね。

誰か 固い、これ。

誰か もっといいのなの？

誰か 噂通り噂通り。

誰か これで一安心。

誰か あいつ、どれが気に入るだろ。

誰か どれくらいもつのかな。

誰か 背もたれはいらない。

誰か ラッキーラッキー。

誰か これは駄目だ。

誰か ずっと座っていると、腰が痛くなるんだよな。

誰か 目移りしちゃう。

誰か 決定、これに決定！

誰か まあ、これが妥当？

誰か うーん、これか、あれか。

誰か 喜んでくれるかな。

誰か うん、いざ持つと重い。

誰か 安っぽい、これ。

誰か 家のどこに置こう。

誰か まあ、第二候補にしようか。

誰か こんなに選択肢があるとは。

誰か あ、持っていかれちゃった。

誰か これ、あの人が使ってたな。

誰か 部屋に置くとすれば、これか。

誰か 親父、喜んでくれるかな？

誰か よし、よしよしよし。
誰か 満足満足。

人々、人ならざるもの、それぞれの気に入った椅子を持って去っていった。
舞台中央には、誰にも選ばれなかった椅子が一脚だけ、ひっそりと残っている。

オープニング終わり。

本編

残された椅子だけがある。その椅子以外はなにもない。一人のスーツ姿の男がやってくる。疲れた様子。男は椅子を見つけ、辺りをうかがってから、ゆっくりと座る。満足したように一息。ドタドタという下品な足音が迫ってくる。

声 兄ちゃん！

悟がやってくる。悟、男を突き飛ばし、椅子に抱き着く。

男 うわっ！（地面にへたり込む）

悟 兄ちゃん、大丈夫か？

少女の声 お兄ちゃん！

恵がやってくる。少し息を切らしているようだ。

恵 ど、どうしたの、急に走り出して。

悟 こいつ、兄ちゃんに腰掛けやがった！

男・恵 兄ちゃん？

悟 てめえ、よくも腰掛けてくれたな。

男 いや、ちよつと疲れてたもんで。

悟 ちよつと疲れてたらなんにでも座るってのか。

男 なんにでもってわけじゃありませんよ。地べただったら尻も汚れますし、人の目だつて気になりますから。

悟 だったらなんで兄ちゃんに座ったんだ、え？ 言ってみろ！

男 さ、さつきから兄ちゃんってなんですか？

悟 兄ちゃんだよ。

男 だから、どこにいるんです？

悟 目ん玉ついてんのか、ここだ！

男 ……、えっと。

悟 ここだって言ってるだろう。

男 これが？

悟 これじゃねえ！

男 ごめんなさい。えー、こちらが？

悟 兄ちゃんさ。

男 ……、そうなんですか、へえ。

悟 なんかに聞いたそうだな。

男 いや別に。

悟 言ってるね、その目が言ってるよ。

男 目はなにも言いませんよ。

悟 いいや、その目が俺に語りかけてきてる。

男 いや、その。

悟 なんだよ。

男 ……川って、下っていくと海にいきますよね。

悟 そう、だな？ うん。

男 鮭だって、海に行った後、産卵のために川に帰ってくる。わざわざね。

悟 確かに。

男 うなぎだってそうです。海で生まれて、そのまま川へ。

恵 そうですね。

男 でしょ？ そういった魚達の生態が証明してくれています。海と川の類似性。だから

まあ、そういうことです、私の言いたいことはそれで全部です。

悟 そういうことって、どういうことだよ。

男 だからそういうことですよ。海と川はそっくり、まるで双子。海と川、川と海？ あ

あ分からなくなってきた。

悟 あんたが分からなきや、俺らはもっと分からねえよ。

男 いやあそれと比べたらね？ あまりにも。

悟 あまりにも？

男 あまりにも、……似てないなあって。

悟 なんだそれ。

男 いや、どう言えば伝わるのかと。

悟 近所の人には、よく似た兄弟ね、特に人の話を聞かないところがそっくり、って言われてんだぞ。

男 そりや、ねえ。

悟 あ、また言った。

男 え？

悟 その目が言ったよ。

男 （目を押さえて）悪い目だ。

悟 言いたいことがあったらはっきり口で言えよ、腰掛け男。

男 そんな言い方ないでしょう。

悟 なにが違うんだ。兄ちゃんに腰掛けたくせに。

男 そりやそうですけど。

悟 どこが似てないって思うんだよ、どこが。

男 そのですね。…あ、山と丘って、似てますよね。

悟 今度はなんだよ。

男 山は高い丘、丘は低い山と言える。どっちも木は生えるし、多様な生き物が住みつく。こうも共通点があると、もう区別がつかない。登っているのが、山なのか、丘なのか。誰に聞いても分からない。あ、昔、ウェールズの山っていう映画がありましたね。

その中に出てくる、フノン・ガルウっていうのがあるんですけど、そいつが山なのか丘なのかって議論があったんです。測量にきたイングランド人は丘と言い、ウェールズ人は山だと言った。こういう問題がおこるってこと自体が、山と丘が似ているってことを証明してる。つまり、

悟 つまり？

男 山と丘の関係から考えると、君達二人、二人？

悟 二人だ。

男 二人としましょう。そのうえで君達は、山と丘に比べると、あまりにも、そう、あまりにも、

悟 俺はどこが似てないんだって聞いてんだ！

男 いや、そりやあ、全体的に、（恵に）ねえ？

恵 そ、そうですか。

男 困ったなあ。

悟 後ろ暗いことが無かったら、なにも困ることないだろ。

男 そのね。気分を悪くしたら申し訳ないけど。

悟 なんだよ。

男 私にはどうもね。

間。男と悟見つめあう。

悟 なんだったって？

男 そんな目で見ないで下さいよ。こう、心苦しくなる。

悟 そんなら。(目をそらす) 言いやすくなったか。

男 多少。

悟 じゃあ言えよ。

男 はい。そのね、どうも私にはその、それ、

悟 あ！？(怒りをこめて振り返る)

男 便宜上！ 便宜上それと言いますよ？

悟 (舌打ちして、また目をそらす)

男 (咳払いをして) それがね、人じゃなくて、

悟 人じゃなかったらなんなんだ。

男 立派な、そう！ 立派な、……椅子に見えるんですが、

悟 椅子だと！

男 いやそう見えるって話で、

悟 確かに兄ちゃんは椅子っぽい。一目見ただけじゃ、区別がつかねえくらいだ。だけど

なあ、ぼいってだけで、椅子じゃねえ！ 俺達と同じ人間だ。なあ？

恵 に、人間？ うん、そう。

男 戸惑ってない？

悟 ちくしょう！ あんたも会社の奴らみたいなこと言うんだな。

男 え？

悟 兄ちゃんを椅子みたいに使いまわしたくせに、挙句の果てには、椅子に退職金は出せ

ません、なんていって道端に放り出したんだ。

男 そりゃ出ませんよ、備品なんだから。

悟 兄ちゃんは正社員だったんだぞ！

男 いや、出ると思います？ もっとお金を回すところあるでしょ。

悟 貢献してたんだから、出てしかるべきだ。

男 いちいちそんなことしてたら、会社傾いちゃいますよ。

悟 そんな会社傾いちゃええ！

男 暴論だ。

悟 大体な、世界は広いんだから、一人くらい椅子っぽい人間がいてもおかしくねえだろ。

男 それなら、人っぽい椅子もあるって言うんですか？

悟 (ちよっと考える) ある！

男 あるんですか。

悟 ヨーロッパやアメリカに行けば、きっとある。ひよっとしたら、前人未到のあのアマゾンの奥にだってあるかもしれない。

男 アマゾン。あそこいらの人って、椅子に座るんですかね。

悟 じゃなきゃどこに座るってんだ。

男 地べたじゃないですか？

悟 そんなら、地べただって椅子ってことになる。

男 人が座るところが椅子になる。つまり地球は、丸くてでっかい、椅子ってことですか？

悟 そうなる。いや、実際そうだろ。

恵 座られるために、椅子は生まれてくるのね。

悟 そうだ、その為だけに。

男 つらい仕事だ。

恵 椅子は椅子に座るのかしら？ 疲れた時とか、ちよっと休みたい時とか。

悟 いや、それは出来ない。休みなんてないんだ。いつだって、座られるだけで、座るところはない。それが椅子のさだめなんだ。

男 大変な仕事だなあ。

悟 俺もそう思うよ。

男 いや、実に立派なお兄さんだ。

悟 兄ちゃんは椅子じゃねえ！

男 えええええ！

悟 なに聞いてたんだ。

男 えええ？ ごめんなさい。

悟 こんだけ言ったら猿でも分かるぞ。

男 いやあ、でもね？ 逆立ちして見たって椅子にしか見えないですよ。

悟 なら逆立ちしてみろ。

男 出来ないですよ。ただでさえ疲れてんだから。

悟 そうだよな、疲れすぎて、兄ちゃんに座っちまうくらいだからな。しょうがない、しょうがないよなあ。

男 嫌味がささるなあ。

悟 よし！ そんなに突っ張るなら聞いてみる、兄ちゃんのを。

男 声？

悟 そうさ、そうすりゃ石みてえに頑固なあんたでも認めんだろ。

男 そうですね。確かに喋ったら、人間でしょうね。

悟 いいな！ 喋ったら、認めるよ。

男 もし喋ったらね。

悟 よし、さあ聞け！

男 よーし！

間。男はどうしていいか分からず、戸惑っている。

悟 どうした、早く聞けよ。

男 ああ、どうしたら？

悟 どうしたら？

男 もう始まっています？

悟 始まるものにも、あんたが始めなきゃ始まんねえよ。

男 なにを始めりゃいいんです？

悟 だから、耳をすませて。

男 うーん、さつきからすましてるんですけど、やっぱり聞こえませんかね。

悟 馬鹿、聞こうともしないで聞こえねえってのはねえだろ。

男 でもどうすれば。

悟 耳をかたむけるよ！

男 さつきから耳をすませたの、かたむけるだの。聞こえないもんは聞こえないんですよ。

恵 あの。

男 なんですか？

恵 耳を、つけてみたら？

男 耳を？ ああ、なるほど。

悟 ピタってくつつけるんだ。いいな。

男 最初から言っつてよ。

悟 聞き逃すんじゃないぞ。さあ、さっさとやれ。

男 急かさんでください。

男、椅子の座面にびったりと耳をつける。
間。

悟 どうだ。

男 どうって。……、耳がちよつとヒヤツとするかな。

悟 なんて言っつたつて聞いてんだよ。

男 いや、なにも、なにも聞こえませんよ。

悟 嘘つけ！

男 いや、本当にウンともスンとも。

悟 耳が遠いんじゃないの。

男 (ムツとして椅子から耳を離し) 耳は良い方です。

悟 嘘つけ、現に聞こえてねえじゃねえか。

男 そりゃあ、だつてねえ。

悟 耳が悪いんだ！

男 耳は良い方です！ 高校の先生にだつて、成績は悪いけど良い耳してるね、つて言われましましたもん。

悟 先生、よっぽど困つたんだな。

男 え？

悟 そこが分かんねえなら、やっぱり耳が悪い。

男 (怒りに震えながら) それなら、自分で聞いてみて下さいよ！

悟 なに？

男 そんなに人の耳を疑うんなら、自分で、ねえ。

悟 よーし、いいだろう。腰抜かすなよ。

男 抜かすわけないでしょう。

恵 お兄ちゃん。

悟 大丈夫だ、俺はちゃんと聞こえるからよ。

恵 そうじゃなくて。

悟 なんだ？

恵 ……、なんでもない。

悟 恵、不安になるのは分かる。ここが俺らの天王山だもんな。けどよ、ここは俺に任せとけ。バッチリ決めてやっから。

恵 うん……。

男 ……。(じつと恵を見つめている)

悟 よし、いくぞ。

男 ええどうぞ。

悟 (フェイントをかけて) 本当に行くぞ。覚悟はいいな。

男 さっさとどうぞ！

悟 兄ちゃん。答えてくれ、俺の耳に。

間。悟、ゆっくりと椅子の座面に耳をつける。

男 どうです。

悟 聞こえる、聞こえるよ。

男 な、なにが聞こえるんです？

悟 そんな、俺の口から言うのは恥ずかしいよ、兄ちゃん。

男 恥ずかしい話？

悟 別にいいだろ、わざわざ言わなくたって。なあ、そうだよな、兄ちゃん。

男 じらさないで下さいよ。なんて言ったんです？

悟 (耳を離す) はつきり言ったよ兄ちゃんは。

男 だから、なんて言ったのかを聞いてるんですよ。

悟 馬鹿、言えねえよこんな道端で。兄ちゃんは下ネタが大好きだからな。

男 下ネタ言ったんですか。

悟 何度も言わせんな。

男 どんな下ネタだったんです？ 軽いやつですか、えげつないやつですか？

悟 そりゃあ、えげつないやつさ。

男 すけべな椅子だなあ。すけべ椅子。

悟 喋ったんだから椅子じゃねえだろ！ あんたが言ったんだぞ、喋ったら人間だって。

男 ちよつと、教えてください。

悟 はあ？

男 なんて言ったか、そつとね。

悟 なんでそんなにこだわるんだ。

男 私も、嫌いなほうじゃないんで。

悟 ……、つたく、しょうがねえな。(ニヤニヤ笑う)

男 はやく、はやく！

悟 分かったって。

恵 うわあ……。

悟、男にそつと耳打ちする。

男 ……、えげつないですねえ！

悟 えげつないだろ！

二人、大笑いする。

恵 男って……。

男 えげつない、じつにえげつない！ しかし、ただの下ネタじゃありませんね。えげつなさの中に、一つまみの知性を感じる。

悟 兄ちゃんは大学院出てるからな。溢れる知性。でもその根底にあるのは、荒れ狂う思春期なんだ。兄ちゃんの中には、思春期がハリケーンのように渦巻いてる！

男 ああどこに置いてきたんだろう、私の思春期。

悟 これで分かったろ？ 兄ちゃんは椅子っぽい、とんでもないスケベだって。

男 ええ、そりゃもう！

悟 やったぜ兄ちゃん！ 兄ちゃんのスケベが役に立ったよ。

恵 それでいいの？

にこやかな間。

男 ……、あ！ いやでもやっぱり、こんな道端でそんな知的でいやらしい話するなんて、まともな神経の人がすることじゃないです。

悟 兄ちゃんはまともじゃねえんだよ。

男 まともではないでしょうね。まともな人間、では。

悟 含みを持たせるな。

男 やっぱり私には……、うーん。

悟 椅子にしか見えねえってのか。

男 こうね、四本脚があつて、背もたれもついてて座面もある。こりや立派な椅子じゃないですかね。

悟 往生際の悪い奴だ。目の前の現実を受け入れろよ。

恵 受け入れてるから、こうなんじゃないかな。

悟 うん？

恵 いや、まあ、うん。難しいね、現実って。

悟 そりゃ難しいだろ。なに当たり前のこと言ってるんだ？

男 (なにかに気付き) そうか、分かったぞ。さては、君はそこらの石にも意思があるって思ってるんじゃないですか？

悟 石っ、て？

男 そのものずばり、ストーンですよ。どうなんです？

悟 い、意思のある石もあるんじゃないか、な？

男 ほらやっぱり！ そんなカビの生えたアニミズムなんて信じてるから、椅子に意思があるなんて思うんだ。だからそんな幻聴が聞こえるんですよ。あたかも椅子が喋ってるかのような、ね。

悟 アニ、なんだって？

男 そんなことも知らないんですか？ アニミズムですよ、ア・ニ・ミ・ズ・ム！

悟 あにい？ お、俺は弟だ！

恵 お兄ちゃん。

悟 恵。(ハタと気付く) は！ そうか、恵は妹。そして兄ちゃんは兄ちゃん。つまり、

俺は兄でもあり弟でもある。俺は両生類だったのか！

男 君は哺乳類です。

悟 あんたの言うことは信用できねえ。恵、俺が両生類ってことは、お前もそうだ。俺達は、卵から生まれたんだ！

恵 冗談でもやめて。

男 まあ、受精卵は卵と言えるな。

悟 (遠くを見つめて) 答えておくれ、小雨の中のアマガエル。お前は俺の親戚かい？

それとも他人？ 俺も仲間に入れてくれ、ハブられるのはつらいんだ。それくらい分かるだろ？ おい、無視すんなよ。こっちだ、こっちだって。(カエルになりきる)

男 なにと喋ってたんだ。(恵に) ねえ、どう思います？

恵 あたし？

男 ええ、どう見えます？

悟 このトカゲ野郎！ 兄ちゃんに決まってるだろ。

男 君には聞いて……、トカゲ野郎？

悟 あんたのことだ。お似合いのあだ名だろ。

男 君はさつきから、腰掛け男だのトカゲ野郎だの。よくもまあそう好き勝手言えるもんだ。大体、トカゲ野郎ってなんだ。

悟 人を人とも思わない、冷血野郎だからだよ。この変温動物め！

男 酷い侮辱だ。親の顔が見たいよ！

悟 兄ちゃんならここに。

男 私は親の話をしてるんだ！

悟 妹もここに。

男 もう黙ってる！ この、このお、こ、こ、こ、こ、この野郎！

悟 絞り出してそれか。底が知れるな。

男 ちくしょう、アドリブなんて大っ嫌いだ！ (恵に) ねえ、助けて。

恵 ええ？

男 君が一言、これは椅子だ、と言ってくれば私は救われます。

悟 恵、こいつにとどめ刺してやれ。

男 妹さん、この際だ。ねえ、なにに見えるんです？ 椅子ですよ？

悟 兄ちゃんだよな？

恵 あたしには、その。

男 その？

恵 その……。

悟 おいおい、恥ずかしながら言ってみてやれ。それで試合終了だ。

恵にとつて重い間。

恵 (絞り出すように) ごめんなさい。これは、

女の声 明！ 明！

取り乱した女、道子がやってくる。

道子 あの、男の子見ませんでした？ これくらいの、可愛い子なんですけど。

男 い、いえ。

道子 あなたは見えない？

悟 み、見てないです。

道子 あなたは？

恵 私も、知らないです。

道子 ああ明。いったいどこに……。 (椅子を見つけ) 明！

悟・恵・男 え？

道子 こんなところにいたの。お母さんを心配させて、悪い子ね、もう。(温かく笑う)

さあ、帰りましょ。(引っ張っていこうとする)

悟 ちょっと待て！ (それを抑える)

道子 なに？ 離さない！ 明が痛がってるでしょ。

男 あの、つかぬことをお聞きしますが、あなたにはどう見えます？

道子 どうって？

男 えっと、それがなんに見えるんでしょうか？

道子 それって、失礼じゃありませんか。

男 いやあのね、私達はそれ、あ、失礼。そちらがなんに見えるかと言う話をしていて。

道子 明よ。

男 ……ほう、へえ、明君。

道子 なんですか？

男 明君、そうか、明君。(なにかぶつぶつ言う)

悟 俺の兄ちゃんだよ。

道子 兄ちゃん？

悟 そうだ。

道子 あなたを産んだ覚えはないけど。

悟 俺も産んでもらった覚えはないよ。

道子 じゃあどうしてこの子の事を兄ちゃんだなんて呼ぶの？

悟 兄ちゃんだからだよ。

道子 馬鹿言わないで。どの角度から見ても、私の明じゃない。

男 椅子じゃないのお？

道子 え？

男 あのね、私にはどう見ても人には見えないんです。多分あの子も、(恵に) ねえ？

恵 あたしは、別に。

男 煮え切らないなあ。お願いだから煮えてよ。

道子 分かった！ さてはあなた達、誘拐犯ね。明があんまり可愛いものだから、そうやって因縁つけて連れて行くつもりなんですよ。それからあぁきつと、身代金を要求する気ね。その手には乗らないわよ。私が守ってみせる！ だから安心してね、明。お母さんがそばにいるから。

男 誘拐犯？ 私が？

道子 じゃなきやなんだって言うんですか？

男 私は通りすがりのサラリーマンですよ。

悟 兄ちゃんに座るような野蛮人だけどな。

男 私は文明人だ！

道子 その文明が隠れ蓑ね。

男 なんて、なんでこんなに責められるんだ。

悟 人の事を椅子だなんていうからだ。

男 まさか、ひよつとして、本当に？ ……、いやいや、私が正しいはずだ。流される

な、私。私はまともだ！ おかしいのはこの二人……。

道子 明は渡さないわよ。

悟 だから兄ちゃんだって。いい加減離れるよ。

恵 (ブツブツと) あれは、あれは……。

道子 いや、離すもんですか。もう二度と、離さない! (椅子を抱きしめる)

悟 離せ! 兄ちゃんが嫌がってんだろ!

男 ああもう! 私の心をかき乱さんでください!

声 道子―、道子―。

全体的にどこかたびれた男、加藤がやってくる。

加藤 ああ、こんなところにいたのか、そこら中探したんだぞ。さあ、帰ろう。

道子 あなた。

加藤 あの、失礼ですがあなた方は?

男 サラリーマンです。ええ、ただの運の悪いサラリーマン。

恵 通りすがりの兄妹です。

加藤 ああそうですか。いや、どうも申し訳ない。家内がご迷惑をおかけしたようで。

男 まあ、そうですね。かけられたかもしれません。

恵 あ、でも、かけられ過ぎたってわけでもないです。はい。

道子 なんであなたが謝るの。この人達、誘拐犯予備軍なのよ。

悟 だから違うって。

加藤 お前は黙ってなさい。いやはやどうお詫びしたらいいやら。

道子 なんでそんなに腰が低いの。もつとシャッキリして!

加藤 高くする理由がないからさ。むしろ低い方が、世の中渡りやすい。どんな時でも

ね。ああ皆さん、私はしがないクリーニング屋の加藤と申します。家内がご迷惑をおかけしたのは、本当に申し訳ない。しかしこれには、とてもとても悲しいいきさつがあるのです。

男 いきさつ。

加藤 ええ、これが聞くも涙語るも涙のお話で、

道子 あなた!

加藤 だから黙ってなさいっ、ここは私が丸く収めるから。ああ皆さん、どうか怒りを鎮めて聞いて下さいませ。

男 いや、別に怒ってやしませんけど。

加藤 ああ、ありがとう御座います！ そのような温かい言葉をかけて頂けるとは。私は今、感動で震えております。あなた方は、まるで聖人のようだ。

悟 早く本題に入れよ。

加藤 あつと、これは失礼しました。つつい皆さんの優しさに感じ入ってしまった。それでは、本題に入りましょうか。ああそれがいい。皆さんのご都合もあるでしょうから。恵 お願いします。

加藤 しかし、どこから話したらいいものか。いや、やはり順を追ってお話ししましょう。先程も申しましたが、私と家内は、隣町でクリーニング屋をひっそりと営んでおります。毎日毎日、疲れたサラリーマンの襟の汚れたワイシャツとか、運動会の後の汚い体操着とか、そういったものを受け取っては洗って返し、受け取っては洗って返し。なんとも単調な毎日です。しかし私達には、そんななんでもない毎日が、なにもものにも代えがたい幸せな日々なのです。これまでも、そしてきっと、これからも。な、道子。

道子 ……。

加藤 そ、そんな私達がある日、子宝を授かりました。それが、家内も申しました明です。これがまた良く出来た子でして、夜泣きは少ない、痲癩もおこさない、目に入れても痛くない自慢の息子でした。もう少しまぶたが大きければ、本当に入れたでしょう。ええ、さながらコンタクトレンズを入れるかのように。(笑う) ……、しかし、そんな可愛い可愛い明なのですが……。ああ！ なんと云えばいいか。

男 大丈夫ですか？

加藤 ちよつとお待ちを。(ポケットからハンカチをとり出して、鼻をかむ) ビーツ。

悟 きたねえな。

加藤 大丈夫、洗えば落ちる。それより、明の話です。あの日は、晴れておりました。雲一つない青空、絶好の洗濯日和だと息まいていたものです。そして、それに答えるかのように、山積みの洗濯物が押し寄せてきた。私一人ではさばき切れないものだから、家内に応援を頼んだくらいです。(急に大声で) おーい助けてくれえ！

男・悟・恵、驚く。

加藤 まあこんな感じで頼みました。

男 今やる必要ありましたか？

加藤 リアリテイーですよ、リアリテイー。大事ですからね。リアリテイーがなければ、

どんな話も頭に入ってきません。それに、これからする話は、これ位しないと信じてもらえないでしょうから。これがとんでもない話なんです。ええ、本当。(もう一度、鼻をかむ) ビーツ。

悟 良く出るなあ。

加藤 もう溜まって溜まって。話を戻します。とにかく忙しかった。受け取った洗濯物をバケツリレーの要領で家内に渡しながら、私は悲鳴をあげていました。いわゆる嬉しい悲鳴ってやつで。そう、あの時はノリにノッていた。いわゆる、ゾーンに入っていたわけです。そんな調子でしたから、一人で遊んでいた明のことは、頭からすっぽりと抜け落ちていた。仕事が忙しい時はそんなものです、仕事以外のことがおざなりになる。ね、分かって頂けるでしょ、この心理。

男 そうですね。

加藤 ああ良かった、分かって頂けるんですね。しかしその抜け落ちた隙、そこに悪魔が潜んでいたのです。初めは、小さな音でした。ゴン、ゴン、ゴン。丁度こんな音です。もちろんそんなこと気にしている暇はありませんでしたから、私は洗濯物のタグ付け作業に熱中していました。それでもずっと、ゴン、ゴン、ゴン。その音はやみません。音は、段々大きくなっていきます。ゴン！ ゾン！ ゾン！ 家内も気付いたようです。ねえ、なんの音？ もちろん私にも分かる訳がありません。しばらく仕事の手を止め、耳をすませました。するとどうやら、その音は洗濯機のある方から聞こえてくるらしい。洗濯物のポケットになにか入っていたんだらうか。そう思い、私は恐る恐る洗濯機に近づきました。そして、蓋ごしに覗いてみると……、ああ！

男 なに見えたんです？

加藤 私が、私がそこで見たのは、洗濯物に混じった、明の……、服でした。悟 な、なんだよ。

加藤 ええ、確かに明の服でした。しかし、ああしかし！ ピンときてしまったのです。この服は、今朝明が着ていた服じゃないか！ 私はまさかと思い、洗濯機の蓋を開けました！ すると、そこには……、ホカホカの明が。

恵 え！

悟 それって。

加藤 そうなんです、うちの洗濯機は乾燥機も内蔵しているのです。

男 そこじゃないでしょ！

加藤 ああすいません！ ちょっと動転しちゃって。でも……、ああ！ どうかどうか、これ以上は言わせないで下さい。こうして言葉にしているだけでも、私の胸はズギズキ痛むのです。丁度、茨が絡みつくように……。

男 続けて続けて、これじゃ生殺しだ。

加藤 ……、アイロン台。

悟 え？

加藤 なんとというデペイズマンでしょう！ 明とアイロン台の出会い、あまりにも悲劇的だった。……、気付けば、翌朝でした。まるで昨日の晴天が無かつたかのように、雨が降っていた。私は直感的に、明はもうどこにもいないのだと悟りました。あの雨が、それを教えてくれたのです。……この傷は、情けない話ですが、私一人で抱えきれそうになかった。だから私は、この傷を家内と分かち合おう、その為の家族なんだから。そう思い、階段を下りました。すると、そこには……。

男 (前のめりに) そこには？

加藤 家内がいました。いつものように、朝食を準備して。私は家内の心の強さに感服しながら、声をかけようと……。違和感があった。明がいないことに対する違和感ではなく、もっと別の。またまた失礼、(鼻をかむ) ビーツ。

悟 鼻水垂らしてる場合じゃないだろ！

加藤 鼻水じゃない、これは涙だ！ ……、さて、そこで私がなにを見たと思います？

(恵を指さし) はい。

恵 え、その、明君？

加藤 ……、近い！ だけど違う。そこにあったのは、いえ、そこにいたのは、……明の服を着せられた椅子でした。

男 椅子？

加藤 そうです、明がいつも座っていた椅子です。それに、明の服が着せてあった。キツチンに向かう家内の背中、そして、明の服を着た椅子。この異様な光景は、夢に違いはない。私はそう思い、ほっぺをつねりました。……痛かった。どうやらこれは現実らしい。そして目をこらしてみれば、その椅子の前に、朝食が置いてあるじゃありませんか。そして家内が、早く食べなきゃ冷めちゃうわよ、明。……、そうです！ その椅子はどうやら、家内にとっては明らしいのです。しかし、どうみても椅子です。だから言いました。道子、椅子は飯を食わないよ。……、でも家内は、なにも言いませんでし

た。ただただ、椅子と談笑するばかり。……ま、まあしかたない、明を失ったばかりなんだから。だからこれも、いつもの日常に戻る為の儀式なんだ。そう自分に言い聞かせ、朝食の席につきました。しかし、しかしです、そんな儀式が毎日毎日続いた。朝食、昼食、夕食、家内はいつも三人前作るので。私と家内、そして食べるはずもない椅子の分を。ずっとずっとずっと！ 気が狂いそうでした、何度私が椅子だと言っても、道子は聞こうともしない。……、だから私は、決意したのです。道子の目を覚ませよう、どんな荒療治になろうとも。それを実行したのが（右手を掲げる）この右手。私の利き手です。ずっと連れ添ってきた最高の相棒。いけるか？ おう、いける。だから大丈夫、取り敢えず呼吸を整えろ。深呼吸三回。落ち着いた。さあ行こう、戦場へ。そして私達は、朝食の席へ向かいました。丁度、今朝のことです。そこはまさに戦場でした。油断したら死ぬ、そんなピリついた空気。しかしなんとか私は、その空気に溶け込んだ。見えるのは、朝食の準備をする家内。そして、我が物顔でそこにいる椅子。私は息を殺し、その椅子の背後に回り込む！ 家内も気付いた様子は見せない。そして、そこでもう一度覚悟を決め、私はゆっくりと椅子の服を掴み、その服を、思いつき引っぺがしたのです！

男 おお！

加藤 決まった！ これが勝利の美酒か！ 私はそれに酔いしれながら、家内に言ってみました。道子、これは椅子だぞ！ 目を開いてしっかり見ろ！ ……、するとどうでしょう。家内は金切り声をあげて家を飛び出していくじゃありませんか。私は慌てて追いかけてました。しかし家内は、短大時代駅伝でならした猛者。情けない話ですが、あつという間にその背中を見失ってしまいました。しかしほっとくわけにもいきません。家内が誰かにご迷惑をかけるかもしれない。その恐怖が私を突き動かし、町中を探し回らせました。そしてやっと、そう、やっと見つけ出して、今に至る訳です。

悟 朝から？

加藤 そう。気付けばもうこんな時間。

男 それは、大変でしたね。

加藤 ええ、一日中探し回りましたから。

男 そうじゃなくて、お話の方。

加藤 ……、ああ、そうですね？ 本当に大変だったんですから。

悟 大人って、大変なんだな。

男 一般的な大人じゃないけどね。

加藤 許していただけですか、こんな私達を。

男 いや、最初から怒っちゃいませんで。

加藤 ありがとうございます。ああ、世の中は冷めきついていると言いますが、こんなところ
ろに人情が残っていたんですね。(笑う)

男・悟・恵、つられて笑う。

道子 あなた。

加藤 なんだい？ 安心して、丸く収まったよ。

道子 さつきからなに言ってるの？ 明はここにいるじゃない。

加藤 (溜息をつく) 道子、いい加減にしなさい。それは、

男・悟 それは？

加藤 え？

恵 あ、どうぞ。続けて下さい。

加藤 は、はい。それは、椅子じゃないか。

男 そら見たか！

悟 なに言ってるんだ！

加藤 え？

道子 明よ！

悟 兄ちゃんだ！

加藤 どこから見ても椅子じゃありませんか？

男 やっぱりそうですよね！ どこから見ても椅子ですよ！ どこに出しても恥ずかし
くない椅子ですよ！

加藤 なんでそんなに喜んでるんです？

男 私が間違っていないと分かって、もうウキウキしてるんです！ いやあ、良かった良
かった。

恵 (ボソボソと) やっぱり、椅子……。

道子 酷いわ、あんまりよ。こんなに可愛いのに。

加藤 可愛くない。仮に可愛いとしても、それは可愛い椅子だ。

道子 ……、やっぱりあなたには、愛情つてものが欠けてるのね。

加藤 なに、私の愛を疑うのかい？ 惜しみなくお前に注いできたじゃないか。

道子 愛。そんなのきつと、最初からありつこなかったんだわ。

加藤 最初から？ これまでの道のりがかりそめだったとでも言うのか。よしなさい、そんな馬鹿なこと、

道子 かりそめ！ かりそめね、そうかもね。逆にあなたは どう思ってるの？ 本当にあったとでも？ 私とあなたの間には？

加藤 あつたさ、あつたとも。この椅子のようにはつきりと。

男 椅子だ、ワンポイント。

悟 ポイント制じゃねえ。

道子 あなたには見えてたの？

加藤 見えるって、愛は見えないものだろう。

道子 それならなんであるなんて思うの。

加藤 (言葉に詰まる) み、見えなくとも、感じることは出来る。

道子 私は感じられなかったわ。

加藤 私は感じていた。それに、椅子が明に見えるお前なら、感じられるはずだ。

道子 ……、こんなことなら、豆腐屋のケンちゃんと結婚すれば良かった。

加藤 ケンちゃん……、ケンちゃん！ やっぱりお前ケンちゃんとできてたのか！

道子 さあ、どうかしらね。

加藤 あいつ、椅子みたいな顔してるくせに。

悟 どんな顔だよ。

道子 顔は関係ないわ。

加藤 俺の方が良い顔だろ、え？

道子 (ため息をつく) はあ。

加藤 なんだそのため息は。(道子に顔を近づける) ちゃんと見ろ、お前の亭主の顔だぞ。

道子 いや！ (加藤の顔を引っぱたく)

加藤 いて。

男 酷い。

加藤 道子、いくら気の長い私でも、限度というものがあるぞ。(鼻をかむ) ビーツ。

悟 こんな時でも出るんだな。

男 まあまあ、お二人とも落ち着いて。

恵 お、お気持ちは分かりますから、

道子 (突然激昂する) あなたになにが分かるの！

恵 ひっ！

悟 おい！

恵 お兄ちゃん。

悟 おばさん、気持ちは分かるけど、

道子 おばさん！ そうね、私はおばさんよ。そうやって、男の影に隠れていられる年じやない。分かっている、そんなこと分かっている！ どんなに抗っても、時間は流れるもの。肌だつてどんどん荒れてくる。化粧をしたつてごまかせない。……、近所の小学生達がね、私に言うの。おはようおばさん、こんにちはおばさん。おばさんおばさんおばさんおばさん、何度も何度も言われる！ 最初はショックだった。でもね、それに慣れていく自分があるの。そうだ、私はおばさんなんだ、しょうがないわ。皆いつかはおばさんになって、そしておばあちゃんになる。そして、そして……。どうせなら、綺麗なまま死にたい。でも、そんな言葉は空しく木霊する。誰も聞いてくれない。ただ、木霊だけが、空しく……。そう諦めていた時、明が生まれてくれた。生む時は鼻からスイカが出たみたいに痛かったけど、そんなの吹っ飛ばんじやうくらい、嬉しかった。私以上に大切な存在が、この世に生まれてくれた。それだけが、ただ嬉しかった……。明はね、私をおばさんから、お母さんにしてくれたの。あの子が泣く度、あの子が怒る度、あの子が笑う度、私はこの子のお母さんなんだ、そう思えたわ。そうよ、今だつて。(椅子に抱き着く) ああ、明。ずっと傍にいて！ 私の可愛い明！

加藤 もういい、もう沢山だ。帰るよ、道子。(道子に触ろうとする)

道子 (拒絶する) いや！ 触らないで。

加藤 ……そんなに私の手が嫌か、え？ そんなら足をくれてやる、こんちくしょう！

(道子を蹴っ飛ばす)

道子 きゃあ！

椅子、その拍子にガタンとなる。

悟 兄ちゃん。(すかさず抱き着く)

男 暴力はいけませんよ！

加藤 家庭の問題に口出さんで下さい。

男 こんな目の前でやられちゃ、そうもいかんでしよう。ほら、豆腐もクリーニングも白つながり。ね？

加藤 ね、じゃねえ！

男 不謹慎でした。

道子 (悟を見て) どきなさい、明から離れなさい！

加藤 (道子を捕まえる) 道子！

男は慌てて加藤を抑える。

三人が取っ組み合っているのをよそに、二人のセリフ。

恵 もう行こう？ ここは危ないよ。

悟 待てよ。(椅子を眺めまわって) 兄ちゃん、怪我はないかい？

恵 もう行こうってば。

悟 兄ちゃんを置いていけるかよ。

恵 ……違う。

悟 え？

恵 兄ちゃんじゃないよ。

悟 お前までそんなこと言うのか。

恵 そいつは！

悟 な、なんだ。

恵 ……トム、クルーズ。

悟 え？

恵 いやもしかしたら、デイカプリオ？ デ・ニーロ？ カンバーバッチ？

悟 兄ちゃんには悪いけど、そんなイケメンじゃないよ。

恵 それなら、ニコラスケイジ！

悟 (椅子をまじまじ見て) 似てるなあ。

恵 ね、とにかく兄ちゃんじゃないの。

悟 だけど見た目は外人でも、中身は純日本人だぞ。納豆だって食うし、みそ汁だって飲む。

恵 違うってば。

悟 お前も兄ちゃんの声聞いただろ？

恵 聞いてない、聞いてないよ。

悟 そんならもう一回聞け。ほら兄ちゃん、恵にも言ってやってくれよ。あ、下ネタ以外でな。(笑う)

恵 お兄ちゃん、目を覚まして。本当は分かってるんでしょ？

悟 目を覚ますのはお前だ、しっかり見ろ。兄ちゃんだろ？

恵 違うよ！

悟 恵！

道子 明！

道子、男と加藤を突き飛ばし、椅子に抱き着く。

道子 明。

悟 (道子を突き飛ばし) 兄ちゃん。

道子 (悟を突き飛ばし) 明。

恵 (やけくそになって) ニコラス！

悟 (道子を突き飛ばし) 兄ちゃん！

恵 (やけくそになって) ケイジ！

道子 (悟を突き飛ばし) 明！

男 (つられてやけくそになり) 椅子です！

悟 (道子を突き飛ばし) 兄ちゃん！

男 (やぶれかぶれで) 椅子だあ！

道子 (悟を突き飛ばし) 明！

加藤 (道子を取り押さえて) 道子！

道子 離して！

加藤 離すものか。さあ、帰ってクリーニングだ。

道子 明、明！

加藤 それは椅子だ。何度も言わせるな！

悟 椅子じゃねえ！

男 椅子だってば！

道子 離してよ！ 明、もう大丈夫よ。お母さんがいるからね。

加藤 いつになったら分かるんだ、明は。

道子 明！

加藤 それが明だというのか、そんなのが。

道子 他に明はいないわ。

加藤 では！ 店で私達を待っているのは？

道子 ……え？

加藤 山積みの洗濯物のことだよ。

道子 洗濯物は洗濯物でしょ。

加藤 いや、あれも明になる。

悟 はあ？

加藤 物言わぬ、されるがままのものを明と言うのなら、洗濯物だって明の筈だ。

恵 なんの話？

加藤 お前は、なにをもつてそれを明だと？

道子 生んだ私には分かる。

加藤 そんな不確かな直感なんて信じるな。私はあの時、洗濯機から出てきた明を見て、触り、観測し、実感したんだ。ああ、明のなんと不確かなことか。

道子 確かよ！

加藤 確かなんて確かにない！ お前も分かっているはずだ、アイロンをかけたお前に分からないはずがない。

道子 え？

加藤 そうだ。私達の商売道具の一つ。

道子 アイロンなんて、あたし。

加藤 いいや、かけた。お前は洗濯物にアイロンをかける要領で、明にアイロンをかけたんだ。

道子 そんなことしない！ 私はそんなこと。

加藤 そして明は、文字通りペラペラになった。そしてそのまま、店から外へ、外から空へ。世界中に飛んでいった。

男 話が大きくなってきた。

加藤 （鼻をかむ）ピーッ。明はここに、いるかもしれないしいないかもしれない。お前はそれでも、明でないかもしれないものを明だと信じこみ、明と同じように可愛がるつ

もりか。それがなんになる？ 犬っころみみたいに、ただ自分の傷を舐めてるだけじゃないか。それじゃ一歩も前進しない。いい加減目を覚ませ、明から卒業しろ！

道子 アイロンなんて、私……。

加藤 いつまでアイロンにこだわってるんだ！

悟 あんたが言ったからだろ。

道子 明、お願い、言っ。お母さん、っ。

加藤 ……、道子。私はなんにも、お前が憎くてこんなことを言ってるんじゃない。分かっ
てくれるね？

悟 怒るやつはみんなそう言うな。

加藤 ちよつと黙っ。

道子 ……。

加藤 なあ、道子。覚えているかい、私達が出会ったあの日のこと。お前はお客さんで、私は店員だった。それが今はどうだ。私は店長で、お前は店員。ドキドキしないか、このドラマ。そのドラマの中で育まれてきた愛の結晶が、お前の言う明だ。つまり明は、私達の愛の結晶だったんだ。

道子 愛、結晶……。

加藤 だが、結晶は碎ける。現に明は碎けた。だが、碎けたなら、新しい結晶を探せばいい作ればいい。ここまで言ったら、もう分かるな？

道子 なにが？

加藤 子供を作ろう。新しいのを。

道子 え？

男・悟・恵 え？

加藤 心に穴があいたなら、塞いでしまおう、お前と私で。少しいやらしい気もするが、それが一番いい。そうだろう？

道子 明の、穴を。

加藤 そうだ、そうぞ！ そうすればもう寂しい思いをしなくてもいい。もう椅子を明と呼ぶなくてもいいんだ。きっと、今よりもずっと幸せな暮らしに戻るさ。なあそうしよう。なんなら、あっちの公園ですか、え？

男 家でやって下さい。

加藤 ああ、そうですよね。ベッドの上がいい。土の上もいいけど、服が汚れますから

ね。医者もクリーニング屋も、清潔感が第一。白い仕事だから。

悟 じゃあ豆腐屋も。

恵 お兄ちゃん、ステイ。

悟 お、おう。

道子 明。あの子は、私のたった一人の、

加藤 一人と言わず、いっぱい作ろう！ 野球が、いや、サッカーができるくらい！ 夢があるだろ？ せっかく生きてるんだ、夢くらい見なくちゃな。

道子 夢……。

加藤 そうさ。一緒に見るんだよ、同じ夢を。お前も私も、お互いしか頼るものはないんだから。おや、こう考えてみると、私達はアダムとイブみたいだなあ。林檎でも齧るか？ え？（笑う）おっと、喜びの鼻水が。（鼻をかむ）ビーツ。（また笑う）

道子 ねえ。

加藤 なんだい？

道子 あなたには他に誰もいないの？ 私しかいないの？

加藤 そうさ、お前だけだよ、道子。

道子 それで、あたしもそうだと？

加藤 実際そうだろう？ 私達は夫婦なんだから。

道子 そう、そうなの……。 （急にケタケタ笑う）

加藤 ど、どうした？

道子 ああ、あなたはずっとそう思ってたのね！（ケタケタ笑う）

加藤 それは、どういう。

男 （察して悟と恵に）君達、聞かない方が良いよ。

悟 え？

次の道子の長台詞の間に、加藤は何度も何度も鼻をかむ。かみ過ぎたせいかな、段々と鼻血が垂れ始める。

道子 あなたには私しかいなかった。ええ、良く分かるわ。あなたは変なところで不器用だから。だからといって、私もそうだとは限らないでしょ？ 自分がこうだから、相手もこう。そううまくいくと思うの？ いくわけないわよね。そんなにうまくいくんだつたら、誰も葛藤も、後悔もしないはずだわ。さっきあなたが言ってたドラマだって生ま

れやしない。そう、生まれなのよ。(ケタケタ笑う)……ねえ、あなた？

加藤 (鼻血まみれの顔で)……なんだ。

恵 ひっ。

男 うっ。

道子 私、今とっても面白い。何故だか分かる？ あなたの血まみれの顔も、なにも知ら

ない空っぽの頭も、全部面白いの。

加藤 まさか、お前。他のやつとドラマを。

道子 あのね。私、身持ちが固い女じゃないのよ？ 知ってた？ 知らなかったでしょう

ね。知ってたらあなたはきっと。(薄く笑う)

加藤 誰だ相手は、ケンちゃんか！

道子 ケンちゃんもいたわね。

加藤 も？

道子 商店街の男は皆、あなたの兄弟よ。

加藤 ……、道子！

加藤、道子の首を締め上げる。

悟、ギュッと椅子を抱きしめる。

男 ちよっと！

道子 そうね、そうすると思ったわ。

男 止めて下さい！

加藤 離せ！ お前も女房を抱く気か！

男 こんなところでおっぱじめるわけないでしょ。

道子 馬鹿みたいね、そんな血まみれに、必死になって。(笑う)

男 あなたも挑発しないで！

加藤 道子は私のものだ。私のもなんだ！

悟 兄ちゃん、大丈夫だからな。

道子 違う、私はあなたのものじゃない。私は明のものよ！

恵 お兄ちゃん。

加藤 違う！ 違う！

悟 嵐は過ぎるさ。きっと、今にきっと。

道子 明は私の子よ！

恵 それは、それはやっぱり。

男 いい加減にしてくれ！

悟 兄ちゃん、俺がついてるからな！

声 こんなところにいたのか！

恵 え？

椅子屋、やってくる。

椅子屋 一体どういふつもりだ、え？ 勝手に逃げ出して。(悟に気付く) なんだ、離れろ！

悟 誰だ、兄ちゃんになんの用だ。

椅子屋 兄ちゃん？

悟 そうだ。

椅子屋 こいつが？

悟 そうだ！

椅子屋 (舌打ちする) なに言ってるんだ？ 相手してられるか。(椅子に手をかける)

悟 (その手を払いのける) 触るな！

椅子屋 どういうつもりだ、これはうちのもんだぞ！

道子 明よ！

椅子屋 は？

道子 私の明！

椅子屋 (悟を指さし) こいつが？

道子 違う。

椅子屋 (男を指さし) まさかあなた？

男 違う違う。

椅子屋 それじゃ、血まみれのあなた？

加藤 もういい。(荒々しく道子の手を掴む) 行くぞ！

道子 離して！

加藤 黙れ！ お前も洗濯機に放り込んで真っ白にしてやる！

加藤、道子を引きずるようにして去る。

道子の声 明あ！

椅子屋 なにがどうなってるんです？

男 私にもちよつと。いや、でも。

椅子屋 なんですか？

男 その、よくあの、血に驚きませんでしたね。

椅子屋 ああ、そうですね。ちよつとびつくりはしましたが、仕事柄見慣れているので。

恵 それって、まさか。

椅子屋 ああ安心して。私はヤクザでも殺し屋でもないから。

悟 じゃあ、会社のやつか。

椅子屋 会社？ 違うね、私は誇り高き椅子屋だ。

男 椅子屋？

椅子屋 そうです、椅子屋です。聞いたことあるでしょう？

男 そりゃ、椅子を売る人はいるでしょうね。

椅子屋 売る？ いやいや売るってのはちよつと違う。そこらの家具屋と一緒にしないで頂きたい。我々は対価を求めず、提供するのです。

男 提供？

椅子屋 提供するのです、世界中の生き物に。このちっぽけな日本列島から、海を越えた先にある、六大陸全てに住む生き物達にですよ。

男 六大陸というと、南極にもですか。

椅子屋 もちろん。ペンギン達は、今にも溶けてしまいそうな氷河の上で言います。椅子を、椅子を頂戴、椅子が無くちややってられないわ、と。そこに我々の登場だ。椅子を求めめるものに、オンリーワンの椅子を提供する。それが我々の使命であり、誇りなのです。そうやって持っていた椅子に座って、皆が言うんだ。ああ椅子があって良かった、ありがとう椅子屋さん、と。そういう時、やっててよかったなと思いますよ。やりがいを感じます、この崇高な使命。歴史を紐解けば、大陸が分かれる前のパンゲアの時代には、椅子は一つで足りたのだとあります。しかし、今はそれじゃおいつかない。なにしろ、地球という大きな椅子は、ガタがきてる。ガタガタで、今にも壊れそうだと。でも座れたもんじゃない。危機感を持った職人達が不眠不休で直そうとするが、どうし

ようありません。しょうがない、年代物だから。ビンテージの中のビンテージ、アンティークの中のアンティークです。そこで先人達は頭をひねって考えた。そうだ、椅子が壊れるなら、新しい椅子を作ればいいんだ！ 安直な発想だが、これが当たった。椅子が増えたことで、地球の負担が減りました。これには皆、万々歳。地球の為ならばと、こぞって自分だけの椅子を求めるようになりました。プラנקトンからシロナガスクジラまで、生き物全てがです！

恵 クジラは椅子に座れないんじや。

椅子屋 ……、はあ。やれやれ、これだから素人は。

恵 ごめんなさい。

椅子屋 見たことないかい？ クジラが椅子に座るところ。

恵 な、ないです。

椅子屋 なら今度海に行ったら見てみると良い。きっと驚くよ、あいつら見事に椅子に座るんだ。尾びれをこうやって、いや実際に見た方が良い。百聞は一見にしかずだ。

恵 はい。

椅子屋 それにひきかえプラנקトンのやつは、

男 ああ！ 話をきって申し訳ないんですが。

椅子屋 (明らかにムツとして) はい？

男 その、地球のために良いことをされてるのは分かりました。世界中全ての生き物の為に働く、そのスケールの大きさも素晴らしいと思います。

椅子屋 (満面の笑みで) ありがとう御座います。そう言っ頂けると疲れも吹っ飛びますよ。

男 でも、そんな大きなスケールの持ち主であるあなたが、なんでこの椅子にそこまで執着するんです？

椅子屋 言っただでしょう。我々は求めるものの、オンリーワンの椅子を提供する。この椅子は、もう持ち主が決まってるんですよ。

男 誰ですか？

椅子屋 シロクマです。確か名前は北極語で、(何か呪文のように唱える)です。

男 え、なんて？

椅子屋 だから、(同じく呪文のように唱える)です。分かりました？

男 な、なんとなく。北極語は難しいな。

椅子屋 でしょうか？ でも私は一年で覚えましたよ、独学でね。

男 それはそれは。(愛想笑いする)

椅子屋 凄いことなんですよ？ アラビア語より難しいんだから。

恵 そんな大事な椅子がなんでここに？

悟 恵！ 椅子なんて言うな。

恵 お兄ちゃん。

悟 お前は騙されてるんだ。

恵 自分を騙してるのはお兄ちゃんですよ！

椅子屋 えっと、兄妹？

恵 そうです。

椅子屋 (溜息をついて) あのね、兄妹喧嘩は家でやって貰えるかな。こっちも忙しいんだ。

悟 帰るのはお前だ！

椅子屋 帰るよ、その椅子を持ってね。

悟 兄ちゃんは渡さない！ 兄ちゃんは兄ちゃんだけのものだ！

椅子屋 ……、良いことを教えてあげよう。私には、障害を実力で排除して良い権限が与えられている。

男 どういうことですか？

椅子屋 こういうことです。そらあ！(悟をぶっ飛ばす)

悟、悲鳴をあげて倒れこむ。その拍子に椅子を離してしまう。

悟 て、てめえ！(椅子屋に襲い掛かる)

椅子屋 (それをいなしながら) 以外にタフだねえ。感心感心。

悟 舐めんな！

椅子屋 そら！(悟に、一発ぶち込む)

悟 (うめく)

椅子屋 どうしたどうした？ 膝が笑ってるぞ？

悟 も、もう、誰にも、座らせねえ……。

恵 やめて！ もうやめて……。

椅子屋 どうするって、ん？

男 そ、そこら辺で。

悟 (あらん限りの力を振り絞って、雄たけびをあげながら椅子屋に殴りかかる)

椅子屋 (それをかわし) 若さだけじゃあな、どうしようもないんだよ! (悟に、一発ぶち込む)

悟 (うめく) あ、ああ。

椅子屋 これで、ラストだ。(悟に、とどめの一撃を叩きこむ)

悟、フラフラと崩れ落ちる。

悟 兄、ちゃん……。兄ちゃんは、俺、が……。 (意識が途切れる)

椅子屋 ナイスガッツだったよ、お疲れ様。

恵 お兄ちゃん! (駆け寄る)

椅子屋 やれやれ、思ったより手こずったな。

男 ぼ、暴力は。

椅子屋 しついですよ、しつけ。暴力はこういった場合、非常に有効な手段です。もちろん、やりすぎちゃいけませんけどね。ほどほどの暴力。これは大事ですよ。何度も殴られたり蹴られたりして痛みになっておかないと、いざ、社会という大きな暴力装置に晒された時、耐えきれずに膝をつくことになりますから。これはいわば、愛の鞭ですよ。

思いやりから生まれた鞭です。成長を促すためのね。

男 愛の、鞭。

椅子屋 そうです。愛が伴えば、大抵のことは許される。そう思いませんか?

男 ……そうですね。そうかもしれません。

椅子屋 ご理解頂けたようでなによりです。さて、と。

椅子屋、自分の方に椅子を引き寄せる。

椅子屋 手間をかけさせてくれたな。悪い椅子だ。自覚あるかい、え? お前が逃げ出したせいで、皆が割を食ってる。お前は無自覚に、周りを振り回してるんだ。そういう奴が一番たちが悪い。迷惑をかけている自覚を持ってない奴は、反省することもないんだからな。……、おや、まだ分かってない顔をしている。困ったもんだな、ええおい。どうやらお前には、教育が必要だ。教えて、育てるやつだ。(ベルトを外し、見せつけ

る) 歯あ食いしばれ!

椅子屋、椅子を徹底的にベルトで鞭打つ。

椅子屋 これでもか、これでもか! ええおい! 何とか言ってみろ!

男 ……やめて、やめて下さい。

椅子屋 (意に介さず) そらそら! 悲鳴の一つでもあげてみる、こんにやろめ! ク

ズ! ゴミ! 卑怯者! お荷物! (鞭打つ手を止めない)

男 やめて下さい! (椅子屋を突き飛ばす)

椅子屋、倒れこむ。

男 大丈夫か、平野君!

椅子屋 (立ち上がって、意外にも冷静に) なんですか?

男 これ以上、見られませんよ。無抵抗な平野君をあんなに鞭打って。

椅子屋 平野君って、誰です?

男 高校の同級生です。彼はずっと、スクールカーストの一番底でした。カーストってのは、ピラミッド型って言われますよね。でも、うちの高校はつぼ型だった。一番底は平野君だけ。後は皆真ん中か、支配階級のとっぺん。そのとっぺんに、平野君はずっとなぶられてた。私は覚えてる。袋叩きにされながら、それでもじっとこちらを見つめる彼の瞳を。でも、私は目をそらした、そらし続けた。僕じゃない、あいつが見ているのは僕じゃない! 何度そうやって、自分に言い聞かせてきたことか。…それから平野君は、学校に来なくなりました。転校したとか、自殺しちゃったとか、根も葉もない噂が飛び交いましたが、真実は、誰も知らない。いいや、誰も知ろうともしなかった。もちろん、私も。あの時そらし続けた目は、今もここにあります。ちよつと視力は落ちただけだ、あの時のままです。この目が言うんです。またそらすのか、また見捨てるのかって。その声に、私はもう耐えきれない。(椅子を抱きすくめる)

椅子屋 そんな感傷で、邪魔をするんですか。

男 いけませんか?

椅子屋 いけませんね。いいですか。そいつは、腰掛けられる為に生まれてきてる。その為だけにだ。それ以上の存在意義はない。

男 そんな残酷な話がありますか。誰かの尻に敷かれ続ける人生なんて、

椅子屋 そいつに人生はない！ そいつは椅子だ！

男 仮に椅子だったとしても、こいつは平野君のなれの果てだ。椅子のような平野君だ！

椅子屋 あなたさっきは、これは椅子だって言っていたじゃありませんか。

男 あの時は、そう、目がかすんでいたんです。

椅子屋 とんだ節操なしだな。

男 守るべき節操なんて、私にはない！

椅子屋 言い切るな！ 恥ずかしくないのか！

男 凄く恥ずかしい！

椅子屋 それならとつとと離れろ！

男 嫌だ、後悔したくない！

椅子屋 (ベルトをかまえる) この！

男 平野君！(身構える)

キラキラする間。

椅子屋、ひとつ息をつき、ベルトをおろす。

男？

椅子屋 いや、見上げた根性だ。これが友情ってやつですか。

男 そ、そうです。

椅子屋 羨ましい、私にはそういう相手がいなかったものでね。こう、ホロリとききました

よ。友情は、鉄より硬いんだなあ。身をていして友人をかばう。素晴らしい、実に素晴

らしい！

男 それじゃあ。

椅子屋 ええ、その友情に免じて。

男 良かったな、平野君！

椅子屋 あなたを代わりに連れていきましょう。

男 え？

椅子屋 さ、立って。

男の腕を掴み、グイッと無理やり立ち上がらせる。

男 ちよ、ちよっと。

椅子屋 さあ行こう。進路を北極へ！（グイグイ引っ張る）

男 はな、離して下さい！（手を振りほどく）

沈黙。

男 ええええ？

椅子屋 どうしたんです？ 行きましようよ。

男 なにを、おっしゃってるんですか？

椅子屋 平野君、可哀そうなんですよ？

男 だからって。

椅子屋 あ、安心してください！ 確かにあなたは、特例中の特例だ。椅子の入れ替えなんて、椅子屋界限では滅多にあるもんじゃない。しかし、私も一人の男だ。認めてもらえるまで、何度でも頭を下げましょう。先方がウンと言うまで、梃子でも動かない覚悟です！ だからあなたはなにも気負わずに、

男 そういう問題じゃないでしょ！

椅子屋 じゃあどうい問題なんです？

男 え？

椅子屋 あなたは平野君を守りたい、我が身を犠牲にしても。それが友情なんですよ？ それがああなたの罪滅ぼしなんですよ？ だったらなんの問題もないはずだ。違いますか？ あなたの言う友情は、そういった自己犠牲の覚悟を伴ったものなんじゃないんですか？ 私はそこに感服したんだ。ああ素晴らしきかな、友情！ さあどうです、これでもどこかに問題があるだなんて妄言を吐くんですか？ 冗談じゃない、友情に水を差しちゃいけませんよ。薄めていいのは、カルピスとハイボールだけだ。さて、それじゃ、行きましよう！ 時間は有限ですからね。マゴマゴしても時間の無駄だ。ほらほら、背筋を伸ばして、堂々としてください。もっと胸を張って！ あなたは美しく、正しいことをしているんだから。（男を引っ張っていこうとする）

男 い、いや、いやだ！（手を振りほどく）

沈黙。

男 そ、その、私は、その……

椅子屋 ……、がっかりだな。

恵 (立ち上がり) 持っていてください！

男 え？

恵 もうたくさんよ。そいつのせいでもう滅茶苦茶。もう見たくない！ 消えてよ、消えて！

椅子屋 君に言われるまでもない。(椅子を背負う)

男 まだ話は、

椅子屋 もうないでしょ。

男 ……。

椅子屋 あるんですか、どうなんです？

男 …… (精一杯の勇気で、言葉を絞り出す) あ、

椅子屋 どうなんだって聞いてるんだ！

男 ……。あり、ません。

椅子屋 腰抜けめ。がっかりしましたよ、ええ本当。

男 ……。

椅子屋 (男をマジマジと見て笑う) あなた、やっぱり椅子に向いてますよ。その疲れ切った、卑屈な横顔が、あいつらにそっくりだ。きつと、ええきつと、立派な椅子になりますよ、私が保証します。(笑う) では、さようなら。せいぜい、座られないようにお気をつけて。(椅子に) そら、行くぞ。帰ってたっぷり教育してやる。

椅子屋、去っていく。

男は、その背中を見送ることしか出来ない。

男 椅子……。私が、椅子。はは、そうだ。座られる側なんだ、いつだって、いつだって

私は……。

恵 もう、行って下さい。

男 そう、ですね。帰ります。疲れた、本当に、疲れたよ……。このまま泥のように眠りたい。泥のように、ジメジメと……。

男、去っていく。

悟 (目を覚ます) 兄、ちゃん。

恵 大丈夫だよ。もう全部、片付いた。

悟 (はね起きて) 兄ちゃん！ いない、どこ行ったんだ？ 恵、兄ちゃんは？

恵 ……。

悟 あいつか、あいつがさらっていったんだな。あの野郎！

恵 お兄ちゃん！

二人、見つめあう。

悟 恵？

恵 ……ねえ、もう帰ろ？ 二人でさ、昔みたいに手を繋いで。

悟 兄ちゃんはどうするんだよ。このままじゃ、香港あたりに売られちまうかもしれないねえだろ。

恵 北極に行くの。もう帰ってこないよ。

悟 北極？

恵 そう。ここから凄く凄く、遠いところ。だからもう、

悟 北極って、どう行けばいいんだ？

恵 帰ろうよ、うちに。

悟 飛行機乗って、それから船に乗ったら行けるかな。どこからだろ、……、分かった！
きつとアラスカだ！ アラスカからなら近いし。問題は言葉だけど、まあ、気合があれば
ばなんとかなるか、

恵 うちに帰るの！ あんなの、もうどうだっていいでしょ。誰かに座りつぶされればいい
じゃない。

悟 おい。

恵 どうでも、どうでもいい。

悟 恵、もしお前が兄ちゃんの立場だったら、どうなんだ。我慢できるか、誰かの臭いケ
ツに敷かれ続ける人生、

恵 ほっとけばいいの！ 自分が敷かれるわけじゃないんだから。

悟 そんなこと出来るもんか！ 目をそらし続けたら、一生目が見えなくなるぞ。

恵 そんな視力いらないわ。

悟 お前にも真っ赤な血が流れてるだろ。その血が騒がないのか！

恵 騒いでるよ、沸騰しそう！

悟 それなら分かるはずだ。

恵 分からないよ、お兄ちゃんはどうして。

悟 どうして分からないんだ、兄妹なんだぞ。

恵 ねえ、助けてよ。私を助けて……。

悟 恵？

恵 なんで、どうして、助けてくれないの？ いったってお兄ちゃんは、あたしを守って

くれたじゃない。

悟 守ってやるさ、だけど今は、

恵 椅子よ！ ニコラスケイジでも何でもなし。お兄ちゃんが兄ちゃんって言ったのは

椅子なの！ 椅子椅子椅子椅子！

悟 やめろ。

恵 分かってくれるまでずっと言うわ。椅子椅子椅子椅子椅子！

悟 いい加減にしろ！

悟 恵は恵を殴ろうとするが、すんでのところで手を止める。

悟 ……。

恵 どうしたの、殴ればいいじゃない。それでも言い続けるけどね。

悟 もういい。

恵 なにも良くないわ。お兄ちゃん、学校で授業中は何に座る？ ファミレスでご飯食べ

る時は？ 家で宿題する時は？ 椅子に座るでしょ。あれは、その椅子だった座るため

の椅子。その上に立ち上がったたり、揺らしたりはするかもね。でも、それでも変わらな

い。椅子はずっと椅子のまま、壊れてガラクタになるまでずっと！ 逆さにしても、横

にしても、どこから見ても椅子なの。椅子は椅子なの！ 聞いている？ 良く聞いてよ。

悟 もういいって。

恵 たとお兄ちゃんには兄ちゃんに見えていたとしても、そこらへんの人達捕まえて、

これはなんですかって聞いたたら、十人中十人がこう言うわ。それは椅子ですね、イット

イズアチェア！

悟 もういいって言ってんだろ！

間。
恵は涙ぐんでるかもしれない。

悟 どうして、お前は……。

恵 ……。

男の声 ああ！

男、腰を抜かして帰ってくる。
それから、幽鬼のように道子が帰ってくる。服には加藤の鼻血がついている。
バツハのマタイ受難曲が流れ始める。

男 あ、あなた、あなた……。

道子 もう、明。どこにいったの、かくれんぼ？

男 人殺し！

道子 子供はいつも全力で遊ぶんだから、困っちゃうわ。まあ、元気に育ってくれるのは、凄く嬉しいんだけど。(笑う) ほらほら、もうご飯の時間よお、帰って来て。今日は明の大好きなハンバーグよ。目玉焼きものつけてあげる。……どこ行っちゃったのかしら？ もう暗くなるのに。夜道は危険よ。特に女の人と子供にとっては。あ、ねえ。知りませんか？ 小さくて可愛いあの子。

男 ひい！

道子 自慢の息子なんです、目なんて私にそっくり。でも、主人にはちっとも似てないの。おかしいでしょ？ ふふふ。ほら見て下さい、この目です、この目の。見える？ 見ませんでした？

男 あ、あっちあっち、あっちあっち。

道子 なにが熱いんですか？

男 あっちです！

道子 ああ、そのあっちね。もう、紛らわしいんだから。ありがとう御座います。

男 あっち、あっち、あっち行ってください。

道子 (小さく笑う) 変な人ねえ。変わってるってよく言われませんか？

男 言われます、言われますから、殺さないで！

道子 ……あなた、まるで震える子犬みたいね。ドーベルマンみたいないかついのじやな

くて、トイプードルみたいな可愛い犬よ。私、犬は大好き。猫なんかよりずっと。だからあなたも。(なにかを聞いて) あ！ 明の声！ 見つけちゃうわよお。どこにいるのかしらーあ。

道子、去る。

男 何も見てない、見てません、見てないよ、勘弁してくれ！

恵 あの、

男 なんだよ、その目。やめろ、見るな！ そんな目で、僕を……。見ないでくれよ、平野君。僕だって別に、君を見捨てたくて見捨てたわけじゃない。本当だよ、僕はいつらとは違う。君と一緒に遊んだことだってあるじゃないか。そうだろ、ね？ ほ、ほら、修学旅行の時だって、一緒に回っただろ？ あれは、いい思い出じゃないか。君だって笑って……。お、覚えてないのかい？ よく思い出して……。やめてよ。なんで、そんな目で。そんな透き通るような目で。やめて、やめてくれ、その目にうつつさないでくれ。嫌だ、見るなって！ 見るなって言ってるんだろ！ お願いだ、お願いします。どうか、どうかあ……。どう、しろってんだ！ どうしようもないだろ！ どうしようも、どうしようも……。どうしようもなかったんだあ！

男、なにかに追われるように叫びながら走り去る。

恵 お兄ちゃん。

悟、椅子屋が去った方へ歩き始める。

恵 (その手を掴む) 駄目！

悟 離せ。

恵 離さない！

悟 この！(勢いあまって突き飛ばす)

恵 (ボタンと倒れる)

悟 あ。

恵、起き上がれない。

悟 その、……ごめ、

恵 ねえ。

悟 な、なんだ。

恵 あたしに、座って。

悟 は？

恵 (その場で椅子になる) 早く。

悟 どういう意味で？

恵 時間は刻一刻と過ぎていくわ。

悟 そりゃそうだけど、お前に座れるかよ。

恵 お願ひ。そうしてくれたらあたしにも、兄ちゃんの気持ちに分かるかもしれない。

悟 兄ちゃんの？

恵 そう。お兄ちゃんが求めてやまない、兄ちゃんの気持ち。

悟 ……。

恵 さあ。

悟 ……、ちょっと、ただだぞ。

恵 うん、ほんのちよつとだけ。

悟 すぐ、どくからな。

恵 分かった。

悟、尻を手で軽くはらってから、恵に座る。
やわらかな間。

悟・恵 ああ……。

恵 これで分かった……。お兄ちゃん。

悟 なんだ？

恵 あたしは、あたしだよ。

悟 それがどうした。

恵 座られてても、あたしはあたし。

悟 そりゃ、そうだよ。

恵 じゃあ座られた兄ちゃんは？

悟 兄ちゃんだ。

恵 そうよね。兄ちゃんの、まま、のはずよ。

悟 大丈夫か？ もうどくぞ。(どく)

恵 ああ、つらかった。

悟 なにがしたかったんだ！

恵 これで分かったでしょ。

悟 罪悪感でそれどころじゃない。

恵 座られても、椅子にはならない。

悟 ……。

恵 そうでしょ？ そのはずでしょ？

悟 だから、兄ちゃんじゃないってのか。

恵 どんなに似てても、椅子は椅子。

悟 お前にはそう見えてるかもしれねえ。だけど、

恵 お兄ちゃんは、椅子？

悟 はあ？

恵 違うよね？

悟 当たり前だろ。

恵 あたしも違う。

悟 そうだよ。

恵 どんなに乱暴にされても、違うわ。あたし達は椅子じゃない！

悟 恵。

恵 (また椅子になる) 座って。

悟 恵……。

恵 座ってよ。

悟 椅子みたいなこと言うな。

恵 椅子は喋らない。

悟 だけど、

恵 あたしが、兄ちゃんの代わりになる。

悟 代わりなんて、

恵 大丈夫よ、自信あるの。

悟 誰も、代わりになんてなれない。

恵 そんなこと分らないでしょ。

悟 兄ちゃんの代わりも、お前の代わりもないんだよ。

恵 探せばきつというわ。特別な存在なんて、そうゴロゴロいるもんじゃないし、

悟 特別だよ！ 俺の、かけがえのない……。

沈黙。

恵 ありがとう、お兄ちゃん。あたしにとつても、お兄ちゃんは特別。

悟 もう、いいだろ。俺は、

恵 だから、座って。

悟 え？

恵 特別だから、座って欲しいの。

悟 なんで、お前。

恵 誰にでもこう言ってるわけじゃないのよ？ 信じて。

悟 恵。

恵 お兄ちゃんだから、座って欲しいの。

悟 兄妹なのに、どうして、こんな……。

恵 お兄ちゃん。

悟 ……。

恵 大好きよ。

悟 ……分かった、分かったよ。お前に座って、どうやって北極に行くか、考える。

恵 北極のことなんて、忘れさせてあげるわ。

悟 忘れねえよ。絶対に。

恵 座ってからの楽しみ。

悟 忘れない、忘れるはずがない。

恵 忘れるわ、きつと。

悟 忘れるもんか！ 俺が、兄ちゃんのことを、

恵 きつとお兄ちゃんは忘れる。あたし以外の、なにもかも。

悟 絶対に、俺は絶対に……。

恵 さあ、じらさないで。

悟
……。

悟、ゆっくりと恵に座る。

恵 (深く息を吐く) ねえ、どう? 悪くないでしょ。初めてだけど、最初からいけると
思ってたの。こういうの好きだし、得意だから。好きだなあ、この感じ。ずっとこうし
てられる。お兄ちゃんも初めてだった? きつとそうよね、お兄ちゃんそういう顔して
るもん。あはは、ごめんね。ちょっとからかいたかっただけ。……、お兄ちゃん。あた
しこのまま、椅子になってもいいよ。お兄ちゃんが望むなら、あたしはなんにだって、
なれないはずの椅子にだって。そう、あたしはなんにだってなれる。きつと、お兄ちゃ
んも、なんにでも、なんにでもなれる……。

徐々に暗くなっていく。
悟と恵だけが、見えている。

幕。